

国際交流センターだより vol.5

7月20日、「海外リサーチ・クラークシップ研究成果報告会」を開催しました。2018年度に海外の研究施設に研究留学した医学科5年生15名が、帰国後も継続してきた研究成果を報告し、学業と研究活動を両立する日々で逞しく成長した姿を披露しました。報告会終了後には表彰式が行われ、嶋医学部長より最優秀賞と優秀賞が授与されました。



参加の学生たち

MESSAGE

国際交流センターセンター長
嶋 緑倫 (医学部長)

この度の海外リサーチ・クラークシップ研究成果報告会では15名の学生の皆さんに研究成果を発表していただきました。5分間のプレゼンとは思えないくらいに密度が高く、学生のレベルをはるかに超えた研究者レベルの内容でした。発表後の質疑応答もとても活発で感心しました。この経験を生かして、医師になってからも研究を続けて国内のみならず国際的にも活躍してほしいと思います。最後に、これまでご指導いただいた所属研究室の先生方に厚く感謝申し上げます。

教養教育部長
酒井 宏水 (化学教授)

海外の研究機関から凱旋帰国されたあと継続して学内で研究した成果を拝聴し、審査をさせていただきました。皆さんが堂々と発表し、質疑応答している姿に、自身が留学先から帰国した当時のことを重ねていました。学会発表、論文発表にまで到達した完成度の高い研究成果も多々あり、皆さんの努力の賜物であることは勿論、ご指導くださった先生方の貢献も相当なものであったろうと拝察します。今後もぜひ研究マインドを持続し研究を発展していただきたいと思っています。

基礎教育部長
堀江 恭二 (第二生理学教授)

2年前の帰国報告会では、海外研修で刺激を受けた様子が前面に出ていましたが、それに対して今回の成果報告会では、2年前の経験を実際の研究成果として結実させた様子が見て取られ、実に頼もしく感じました。医学生としての学業に加え、時間を捻出しながら研究を進めるのは容易ではなかったと思いますが、きっと皆さんの将来に繋がるものと確信しています。最後になりますが、学生をご指導・ご支援いただいた教員の皆様、事務方の皆様へも厚く感謝申し上げます。

国際交流センター副センター長
森 英一郎 (未来基礎医学准教授)

海外リサクラ3期生にあたる現5年生は、2年次の冬に、それぞれが希望した海外研究施設でのリサクラ研修に参加しました。今回の研究成果報告会では、その後の2年間に学内の研究室に所属して研究活動を継続した成果について、御発表頂きました。2年生の春頃から始めた事前準備期間から数えると3年以上の期間、研究室に所属し研究活動に従事したことになります。学部学生の学業と両立しながら取り組んだこの経験は、本プログラムに参加した方々の今後に大きく影響を与えることが期待されます。

発表学生一覧 (氏名・所属研究室・発表演題・留学先)

| | |
|---------------------|--|
| ■ 野津仁志 (第一解剖学) | [Neuronal responses to stress during development stage in BTBR mouse model of autism spectrum disorder 発達期における自閉スペクトラム症モデルマウスのストレスに対する神経応答] (🇲🇾 Monash University Malaysia / マレーシア) |
| ■ 森川成孝 (未来基礎医学) | [神経変性疾患における液-液相分離破綻メカニズムの解明] (🇨🇦 University of Alberta Hospital / カナダ) |
| ■ 佐々木俊秀 (消化器・総合外科学) | [膵癌肺転移におけるT細胞抑制因子と局所免疫機構の解明] (🇹🇼 National Taiwan University / 台湾) |
| ■ 小澤享平 (免疫学) | [B細胞におけるヒストンメチル化酵素SETDB2の発現機構と機能解明] (🇲🇦 Sidra Medicine / カタール) |
| ■ 小林かれん (薬理学) | [ミトコンドリア融合が自然免疫に及ぼす影響について] (🇺🇸 Medical College of Georgia, Augusta University / アメリカ) |

最優秀賞 医学科 5年 中前 和 (生体分子不均衡制御学)

「ASCT2 と SMCT1 は腎臓における d-serine トランスポーターであった」

海外への派遣が決定して以来、本プログラムを通して、研究や英語、積極性やプレゼン力等、学べるものや得られるものが沢山ありました。帰国後の約3年間に亘る研究室活動では、学業やクラブ活動との両立が大変な時もありましたが、様々な実験手技や研究に必要な論理的思考を習得でき、また学会発表や論文執筆にも携わる貴重な経験をさせて頂き、入学した当初には想像もつかなかったような自分になったように思います。



最後になりましたが、本成果報告会において光栄な賞を頂きましたことが、懇切丁寧にご指導くださった先生方への恩返しになりましたら幸いです。
(CNRS Paris / フランス)

優秀賞 医学科 5年 下 結香 (生体分子不均衡制御学)

「オーファントランスポーターの抗体作製と検出」

留学中また渡米前後のトレーニングを通して、研究には、自分一人ではなし得ない大きなことに仲間と挑戦できる楽しさがあることを知りました。私自身が取り組んだ実験の成果はほんの僅かでしたが、チームの一員として研究を進めることができました。このような機会をくださった永森教授、ラボの皆様、また本プログラムに携わってくださった全ての方々に感謝申し上げます。多くの研究者の挑戦によって医療が発展していることに感謝し、今後も精一杯、尽力してまいります。



(Texas Tech University Health Sciences Center / アメリカ)

優秀賞 医学科 5年 西岡 樹 (免疫学)

「Immunological contribution in the development of lung cancer with pulmonary fibrosis」

この度、海外リサーチ・クラークシップ研究成果報告会にて優秀賞を授与していただき誠にありがとうございます。リサーチ・クラークシップの後、2年以上が経過し、現在は大学病院でベッドサイドラーニングを行っていますが、医学のあらゆる場面において基礎研究がいかに大切であるのかを日々痛感しています。ミシガン大学での経験を糧に、今後も基礎医学と臨床医学の橋渡しとなるような研究ができるよう引き続き精進していこうと思います。



(University of Michigan Medical School / アメリカ)

優秀賞 医学科 5年 藤原 邑 (循環器内科学)

「The treatment of *Lmna*-associated DCM with AAV improved the prognosis in our mouse model」

この度は、優秀賞を頂き、大変光栄に思います。振り返れば、この海外リサーチ・クラークシップで、Cincinnati Children's Hospital の坂部正英先生に御指導頂き、基礎研究の面白さに気づかせて頂いたことが、研究への姿勢を変える分岐点だったと思います。帰国後も、循環器内科学教室で心筋症の研究に携わり、4年生のコロナ禍の中、学会発表が出来ました。研究活動を通して得た考え方や積極的な姿勢を、今後のキャリアで活かしていきたいと思っています。御支援・御指導頂いた皆様に改めて、感謝申し上げます。



(Cincinnati Children's Hospital Medical Center / アメリカ)

発表学生一覧 (氏名・所属研究室・発表演題・留学先)

| | |
|------------------|--|
| ■ 北吉史佳 (未来基礎医学) | 「ATR 阻害は 5-FU の感受性を増強する」 (University of Alberta / カナダ) |
| ■ 船内文裕 (第二生理学) | 「CRISPR/Cas9 システムを用いた GFP ノックインマウスの作製」 (Lincoln University / ニュージーランド) |
| ■ 米田朋矢 (未来基礎医学) | 「ヒト人工多能性幹細胞の骨分化実験における RT-qPCR 分析に用いるリファレンス遺伝子の検討」 (University of Texas Health San Antonio / アメリカ) |
| ■ 鄭 美栄 (未来基礎医学) | 「ヒト脳幹オルガノイドのプロトコル作成」 (University of Bologna / イタリア) |
| ■ 山岡大真 (分子病理学) | 「マイクロ流体トレーナーと Organ on a chip、その未来について」 (University of Bologna / イタリア) |
| ■ 渡邊真子 (微生物感染症学) | 「 <i>Citrobacter sedlakii</i> が産生する Sed-1 β -ラクタマーゼ産生機構の研究」 (Case Western Reserve University / アメリカ) |